

## 境地

横田 恭三

最近の若者は手紙を書かなくなった。というよりも、書く必要性を感じなくなったといった方がいいかもしれない。その原因の一つに、携帯電話やEメールの普及がある。相手に届くまで日数を要する手紙は、スピード化社会においてはほとんど意味を持たない。ましてや毛筆で手紙を書くなどということは、現代の若者から見れば、社会に逆行した奇特な行為と映るに違いない。文字文化に関わる者としては、何とも寂しい限りである。

ところが、携帯電話を持たず、私的な手紙には必ず毛筆を用いている人がいる。片田舎に住む隠者の一人かといえば、そうではない。都会的な生活を楽しんでいるごく普通の人である。彼には彼なりの主張がある。便利になることは悪いことではない。が、あえて不便さの中に身を置くのをよしとする。便利さを最優先して物事を進めたなら、今日まで培ってきた悠久の文化をほんのわずかな時間で失ってしまいかねない。一度失われた文化を、元に戻すことは不可能であろう。だから、便利さに溺れぬよう自制し、世の中の動きに逆らっても、自国の伝統文化を見つめる時間を持つ必要があるのだと。そして、手紙の効用について次のように考えている。手元に届いた封書を見ただけで、差出人が誰かすぐわかる。開封するまでの僅かな時間でも、いろいろ

な思いが頭をよぎる。ある種の興奮を覚えるときでもある。ましてや心を寄せる人からの信書ならなおさらであろう。手紙のよさは、何度でも読み返すことができ、その行間に秘められた相手の真意を推し量ることができるところにあると。

手紙は、古くから用いられてきた優れた文化である。司馬遼太郎は、かつて文明と文化の違いを一言で表現したことがある。「ビルが建ち並び、電気水道が通ればもうそれは一つの文明である。しかし、文化は違う。人間の営みとそれに付随する精神というものがなければならぬ」と。文化と人間の精神とは表裏一体といえよう。人生において、競走馬のように猛烈に駆け出す時期があってもいい。がむしゃらに生きる時期があってもいい。しかし一方で、スローに振る舞うことも忘れてはならない。そこから新たに覚えてくるものがあるに違いないからだ。こだわりを持つ例の御仁は、ニュース以外のテレビ番組を極力見ないという。メディアによって創り出された幻想にけっして惑わされず、冷静な判断力を維持したいからだ。さらに彼はいう。真夜中に墨を磨り、筆を執って手紙を書くとき、自ずと精神が研ぎ澄まされるのだと。その御仁は、墨を磨りつつ伝えたい内容をじっくり吟味した後、一気に筆を走らせる。しかし、すぐには封をしない。翌朝もう一度読み返し、相手に失礼や誤解を与えていないか内容を確認してから投函するのである。真夜中に書いた文は、ときには鋭利な刃物のように相手を傷つけることがあるからだ。——このような御仁は今では稀少となってしまった。

ところで、鉛筆やボールペンの歴史は浅い。鉛筆の場合でもせいぜい四・五百年程である。毛筆はどうだろうか。勿論、ルーツは中国に求めなければならない。今から五〇年ほど前、河南省信陽県にある戦国早期（二三〇〇年以上前）の楚墓から、毛筆・筆套一セットが出土した。軸の長さは二〇cm余り、鋒長（毛の長さ）は

二・五cm。現在、我々が一般に使用している小筆と大差がない。秦の蒙恬<sup>もうてん</sup>將軍が筆を造ったことを示唆する「蒙恬造筆」という成句があるが、戦国早期の筆が出土している以上、当然この話は修正される必要がある。つまり、この成句は「改良筆を造った」という意味に解さなければならぬ。実は、殷代の遺跡からも筆の使用が認められる甲骨片が出土している。その甲骨片には筆を手に行っている象形「𠄎」字が刻まれている。この文字に「竹」かんむりを加えれば「筆」になる。また、朱墨で書かれた甲骨片も出土している。つまり、少なくとも三三〇〇年以上前から、軸に動物か何かの毛をつけた筆があったということが想像される。毛筆は、長い歴史の中で幾多の改良がなされながらも、その原型は今も昔もほとんど差がないのである。西洋には「カリグラフィー・アート」という分野があるものの、本当の意味での芸術になり得なかった。東洋における文字の場合、漢魏に至って書法芸術として大きく花開いた。早くから良質の毛筆を用いたことが一つの理由であろう。筆圧をかければ開き、軸をつり上げれば閉じる。細太の変化は、書き手の意識と毛筆の作用によって、絶妙な味わいをもたらす。簡牘<sup>かんぎ</sup>や帛<sup>はく</sup>（絹布）に書いていた時代を経て、紙の発明・普及とともに、横への広がり新たな感触を手に入れた。さらに、神聖なものから実用的なものへ、複雑な点画から簡便な点画へ、また一方で幽玄な趣を持つものへと変化していった。

書は、紙と筆さえあれば誰にでも書けるという人がいる。確かに文字を書くことはできるが、それは実的な書の世界しか知らない人の発言とみてよい。そこに何らかの芸術的価値を付加しようとするならば、正確な鍛錬に裏打ちされたある種の主張を持たなければならぬ。主張のない書は芸術とはなり得ないのだ。書は、二次元に繰り広げるモノクロームの世界だから、どちらかというと言調な世界と思われがちだが、鑑賞眼に卓

越した方なら微妙な色の違いを認識できるであろう。さらに、筆力・筆勢、筆の開閉、振れや拵りなどの変化によつて、筆線に潤滑と凹凸が生じ、平面的な中に奥行きが生まれてくる。一回性の芸術だからこそ、一瞬の動きの中に精神性が深く関わってくるのである。何気ない禅僧の書が墨跡として長く珍重されるのも、そこに高い境地が感じられるからであろう。「書の好醜は心と手に在り、強いて為すべけんや」とは、後漢の趙壹の言葉で、「書の善し悪しは心と手に委ねられている。むりやり創るうとしても無理なのだ」といった意味である。各地で盛んに開催されている書道展の中には、造形の奇抜さだけが目につくものがある。さらに、師匠流のオンパレードといった社中展も少なくない。こうした作品の中に、高い境地を見出すことは至難である。

では、我々凡人が高い境地を得るにはどうしたらよいのであろうか。

「便利さだけを優先するような社会に迎合しないことである。情報の洪水から身を守り、人間として必要なものを精選する眼力を持つことである。その眼力は、真夜中に墨を磨り、筆を執ることで養われるのだ。」と、その御仁は独自のレトリックを用いて喝破した。